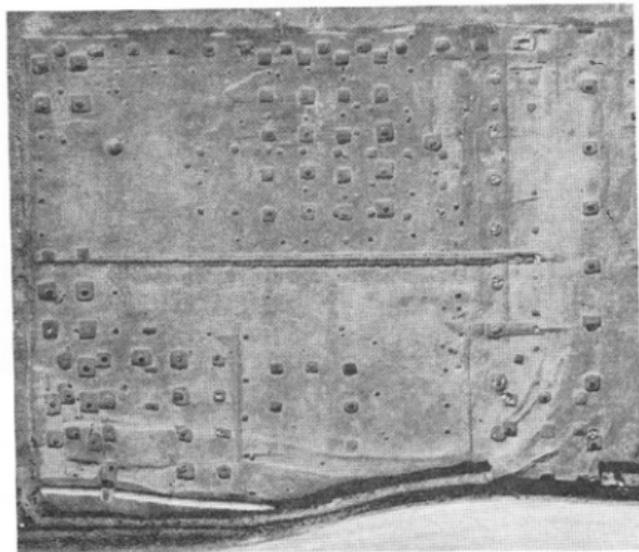
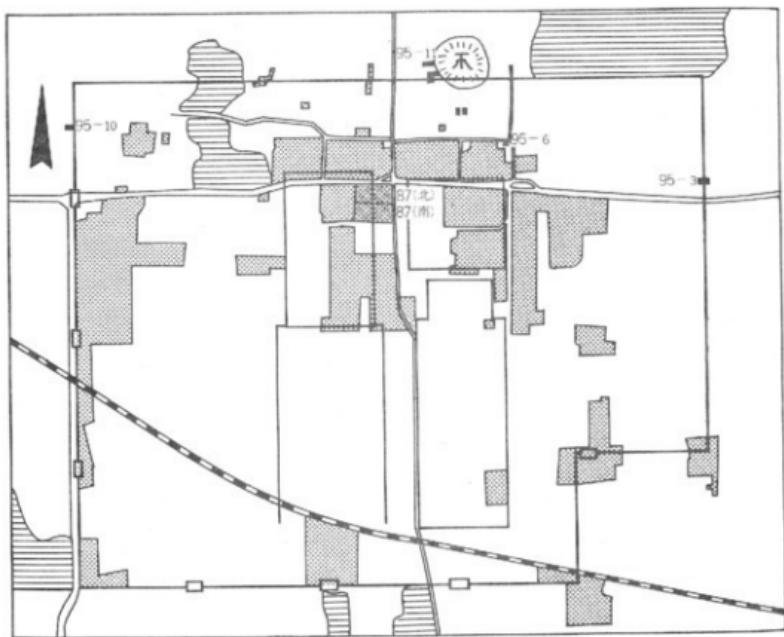


昭和50年度 平城宮跡発掘調査部  
発掘調査概報



昭和 51 年 5 月

奈良国立文化財研究所



第1図 平城宮発掘調査位置図

## 目 次

I	推定第1次内裏東半地区発掘調査	3頁
II	宮跡内および周辺民家密集地域の 現状変更等にかかる調査	15
III	薬師寺の発掘調査	17
IV	大安寺の発掘調査	19
V	法華寺旧境内の発掘調査	21
VI	海竜王寺北方の発掘調査	22
VII	西大寺の発掘調査	23

## 昭和50年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

平城宮跡発掘調査部は、昭和50年度の発掘調査を第1表のように実施した。以下に概要を報告する。

次数	調査地区	面積	調査期間	備考
87(北)	第一次内裏東半地区	3,400m <sup>2</sup>	75年 7.2 ~ 10.2	
87(南)	"	2,830	76年 1.6 ~ 3.25	
94	左京八条三坊十・十五坪(奈良市東九条町姫寺960)	2,500	75年 4.4 ~ 6.16	
95-1	法華寺旧境内 (奈良市法華寺町448-1)	180	4.7 ~ 4.19	中谷佐一氏所有地
2	海龜王寺北方 (〃 〃 903 ~ 1.3.4)	161	5.7 ~ 5.17	北良夫氏所有地
3	平城宮東面大垣 (〃 〃 818-2)	23	7.17 ~ 7.19	川崎末連氏宅
4	法華寺旧境内 (〃 〃 630-33)	26	7.21 ~ 7.24	川西唯夫氏宅
5	" (〃 法華寺東町419)	22	8.19 ~ 8.21	福山寛氏宅
6	第二次内裏北方 (〃 佐紀東町2192)	12	8.25 ~ 8.26	田中友一氏宅
7	法華寺旧境内 (〃 法華寺北町937-1)	48	9.3 ~ 9.6	東口剛氏宅
8	" (〃 法華寺町)	24	9.8 ~ 9.13	奈良市(水道管敷設工事)
9	西大寺旧境内 (〃 西大寺芝町1-1-5)	33	10.27 ~ 10.30	西大寺境内
10	西一坊大路 (〃 佐紀町2610)	40	76年 1.20	蘿原義高氏所有地
11	平城宮北面大垣 (〃 〃 塚本2465)	58.5	1.27 ~ 1.30	加茂実氏宅
96	左京三条二坊六坪(奈良市尼ヶ辻町ゴドサ甲609-1) 薬師寺食堂北方地域	4,200	75年 5.30 ~ 7.9 76年 10.13 ~ 12.23	奈良郵便局移転予定地
	北門南方地域	250	9.10 ~ 10.1	
	八幡院	27	9.25 ~ 9.29	
	大安寺北僧房	120	76年 3.25 ~ 4.2	
	東僧房東方	192	75年 12.6 ~ 12.23	大西光夫氏所有地
		75	12.11 ~ 12.17	大西巡氏所有地

第1表 昭和50年度発掘調査一覧表

## I 推定第1次内裏東半地区発掘調査（第87次北・南）

平城宮跡第87次調査は1975年7月2日から同年10月21日までと、1976年1月6日から同年3月25日までの両度にわたり、推定第1次内裏の東北部およびそれに東接する地域で実施した。調査面積はおよそ $6230m^2$ （東西78m・南北80m）である。

### 1 調査地区

推定第1次内裏は平城宮の中央北寄りに位置し、その北半は宮内でも最も高台の好所を占める。今回の調査地区はその高台の東縁にあたり、北は通称一条通、東は歌姫街道に接する。当調査部の地区割に従えば6ABC-U-6ABC-V・6ABP-A・6ABP-B地区である。調査区の西側は第69次・72次調査として、一条通を隔てた北側は第7次調査としてすでに発掘調査済である。

調査地の中央には南北に通る一段の段差がみられ、それを境にして西側一段高い部分が6ABP地区、東側が6ABC地区である。この段差は奈良時代の築地位置を踏襲した水出の畔壁であるが、築地の東半部は水出造成時に削りとられた。

調査地区的上層は、上層を耕土・床土が一面に覆う。床土の下層は6ABC地区と6ABP地区で若干様相が異なる。6ABC地区西半では床土のすぐ下に礫を多く含む地山がある。地山は東へ向かってゆるやかな傾斜をもち、東半では地山の下がりに応じて次第に厚みを増す黄褐色粘質土の整地層がみられた。また東半では地山の凹凸が激しく、部分的な整地が行われている。6ABP地区南半では床土の下がすぐ赤褐色粘質土の地山となるが、北半には地山の上に敷きつめた灰褐色バラス混りの整地層が残存していた。この整地層は厚さ10cm前後で、南へゆくほど薄くなり、南半では全く認められなくなる。

### 2 遺構

今回検出した遺構は埴積の擁壁・築地回廊・築地・建物・塀・門・溝・暗渠などで、このうち建物・塀・門はすべて掘立柱を用いたものである。その他に瓦・土

器などを含む多くの土壤がある。

#### A期の遺構

この時期に属する遺構には。積の擁壁1（SX6600）、建物2棟（SB8315・8330）、門1（SB8333）、塀3条（SA3777・8229・8231）、溝3条（SD3715・3790・8327）、暗渠2（SX8307・8311）がある。溝SD8327と塀SA3777および建物SB8330には重複関係があり、A期は少なくとも2時期に細分できる。

この時期には推定第1次内裏の東面は築地回廊あるいは塀で限られる。その西側は南面を高い埴積の擁壁SX6600によって限られる敷地が造成され、東側の発掘区東端には北から南へ流れる平城宮の基幹排水路SD3715が掘られる。基幹排水路に沿った西岸にはSB8315・SB8330が建つ。

埴積の擁壁SX6600はすでに第69次調査で検出されており、今回はその東延長部分を発掘した。南に向かってゆるやかに下がる地山の南方を切りとて造成した高い壇で、現状で1.7m程の高さをもつ。壇前面の壁に塗を平積みにして化粧を施している。壇の前縁は当調査地西南隅において斜めに南方へ張り出し、発掘区の南端で再びわずかに北寄りに折れて東へ延びることが確認された。東方への延長は発掘区外となる。

今回の調査地区ではSX6600の壇上でA期に属する建物は検出されなかつた。壇の下は一面にパラスを厚さ12cm程に敷きつめている。

塀（SA3777）は発掘区中央を南北に通る。16間分を検出した。柱掘形は一辺約1.2mの方形で、一辺約40cmの正方形を呈する柱痕跡をもつものがあった。（この塀は第27次・41次調査で南方部分が検出されており、第27次調査では角柱の柱根が出土している。）柱間は1.5.5尺等間であるが、北から8番目の柱穴を欠き、そこでは柱間3.1尺となる。またこの部分の東側に2.0尺離れてSA3777と平行に塀SA8231がある。5間分が検出され、柱間は南の4間が1.0尺等間、北1間が7尺である。SA3777の柱間3.1尺のところは東面の出入口で、SA8231はその日陰塀と想定される。

東面を画する築地回廊は、その側柱の礎石跡が削平されていて検出できなかつたが、発掘区中央南端において西側雨落溝 S D 3 7 9 0 を検出した。S D 3 7 9 0 は底にパラスを敷きつめた溝で、発掘区南端から約 1 1 m のところで南へ 1 段下がる。北方は 1 0 m 程の間に底のパラス敷きの痕跡をのこすのみで、以北は削平されている。溝には廃絶時に投げ込まれたとみられる瓦片・凝灰岩片・パラスなどがつまっていた。S D 3 7 9 0 が一段下がったところから暗渠 S X 8 3 1 1 によって築地回廊の基壇下を雨落溝と直角に東方へ抜けた溝 S D 8 3 2 7 がそのまま東へ流れ、基幹排水路 S D 3 7 1 5 に注ぐ。

S X 8 3 1 1 は素掘りで、幅 9 0 cm の掘形をもつが、中央の幅 3 0 cm の部分に汚れた土がつまつていて、木樋などの施設のあった可能性が強い。溝 S D 8 3 2 7 は廻 S A 3 7 7 7 の柱位置を通過しているが、この部分は後世の溝によってすでに削平されており、廻との前後関係は不明であった。

これとは別に築地回廊には S X 8 3 1 1 の北方約 8 m のところに盲暗渠 S X 8 3 0 7 が設けられている。S X 8 3 0 7 は幅約 8 0 cm 、深さ 3 0 cm で地山を V 字状に切り込み、パラスをつめたものである。

東面築地回廊には発掘区中央で門 S B 8 3 3 3 がひらく。柱間 1 間・1 0 尺で、築地の一部を切りとった簡単な門であろう。北側の柱穴は浅く、B 期の門 S B 8 2 3 0 の柱穴によって切られている。この門 S B 8 3 3 3 の東側に築地回廊と平行に廻 S A 8 2 2 9 がある。廻は 5 間で、柱間は 8 尺等間である。門 S B 8 3 3 3 に対応しており、日隠廻と考えられる。

溝 S D 3 7 1 5 は宮内の基幹排水路のひとつである。素掘りの大溝で、発掘区の東端部で検出した。幅 3 m 前後、深さ 1.5 m を測る。この溝は後の B 期・C 期においても改修されながら存続している。

S D 3 7 1 5 の西岸には S B 8 3 3 0 が建てられる。南北棟建物で、規模は桁行 6 間・梁間 2 間、柱間は桁行が 1 0 尺等間、梁間が 9 尺等間である。棟通りには 2 間おきに間仕切の柱が立つ。この建物の東側柱は後の S D 3 7 1 5 改修の際に削られてしまつたらしく、部分的にしか検出できていない。S B 8 3 3 0 の内

部を溝 S D 8 3 2 7 が通過するために両者は共存し得ないが、柱穴と溝との重複関係ではなく、両者の前後関係は不明である。S B 8 3 3 0 はB期の建物 S B 8 3 2 0 と重複関係があり、S B 8 3 2 0 よりも古い。建物 S B 8 3 1 5 は S B 8 3 3 0 の西北にある南北棟建物で南妻柱筋が S B 8 3 3 0 の北妻柱筋に揃う。B期の建物 S B 8 3 2 0 の廃絶時に掘られたと思われる土壌の下層で検出した。建物規模は桁行3間、梁間2間で、柱間は桁行、梁間とも5尺等間である。

期	遺構	柱間数	備考	期	遺構	柱間数	備考
A	SB8315 8330 8333	3×2 6×2 1	間仕切 門	C	SB8218-A 8218-B 8219	5×2 〃 〃	
	SA3777 8229 8231	14以上 5 4	目隠屏		8222 8224 8300	7×4 6×4 3以上×4	隅欠四面廊 三面隅欠廊 東西廊
	SD3715 3790 8327		基幹排水路 築地回廊雨落溝		8305 8310 8325	7×2 3×2 5×2	
	SX8307 8311		盲暗渠 暗渠		SA3819 6624		南北妻に附 東面築地
B	SC5500 6670	16以上 3以上	東面築地回廊 北面築地回廊		6629 8217	16 11	
	SB8210 8215 8230 8240 8245 8302 8320	6×2 〃 1×2 5×2 7×3 2以上×2 7×2	間仕切 〃 門 総柱 間仕切	SD3715	6607 6631 8226 8227 8301 SX8309		基幹排水路 築地雨落溝 雨落溝 暗渠
	SD3715 6618 8211 8214 8216		基幹排水路 雨落溝 〃 築地回廊雨落溝 〃	D	SB8234 SA8238 SD8237 8239	6×2 28以上	南妻に附

第2表 第87次(北・南)調査造構時期別表

### B期の遺構

B期の主な遺構には築地回廊2棟（SC5500・6670）、門1棟（SB8230）、建物6棟（SB8210・8215・8240・8245・8302・8320）、溝5条（SD3715・6618・8211・8214・8216）がある。建物・門・辯はすべて掘立柱を用いたものである。またB期に属する建物はすべて南北棟で、柱間はどれも10尺である。

この時期にはA期の堆積擁壁SX6600は埋立てられ、壇の前線は南方へ拡張される。推定第1次内裏の東面と北面をめぐる築地回廊SC5500・SC6670が新たに建設されて、築地回廊で囲われた区画内の壇上には10尺方眼の地割を基準とする整然とした建物配置がみられるようになる。東面の築地回廊の東側は幅15mにわたって遺構がみられず、A期から存続する基幹排水路SD3715の西側に沿って2棟の南北棟建物SB8240・SB8320が建てられる。

築地回廊SC6670は発掘区北端部で、南側柱と想定される4個の礎石抜取跡を検出したのみである。SC5500は発掘区の中央を南北に通りA期の東面築地回廊の位置に一致する。西側は16間分、東側はほとんど削平されていたが、発掘区南端で1間分の側程礎石根石列を検出した。このうち1個の礎石掘形が、A期の辯SA3777の柱掘形を切り込んで掘られている。回廊側柱の柱間は13.3尺強の等間で、あるいは40尺を3等分した可能性もある。梁間は2間で、柱間12尺等間である。築地本体は削平されており、検出できなかった。

SC5500には発掘区中央で門SB8230が設けられている。門の桁行は1間で柱間15尺、梁間は、門の東半が削平されているが、2間で柱間12尺等間と推定される。この門は築地回廊SC5500と棟通りを揃え、推定第1次内裏の中軸線から東へ300尺の位置にある。門SB8230はまた、北面築地回廊の推定心から南へ150尺の位置にある。築地回廊SC5500・SC6670に開まれた内側で、回廊雨落溝SD8216・SD8214を検出した。幅40cm、深さ10cm程の素掘りの溝で、2条の溝は回廊の東北入隅部において合流

し、東方へ流れ出る。S D 8 2 1 6 は北方約20mを検出したが、以南は削平されていた。

築地回廊で画された内部で4棟の建物を検出した。北方で東西に2棟並ぶS B 8 2 1 0・S B 8 2 1 5 は桁行6間・梁間2間の同規模・同形式をもつ。両建物の棟通りには北から2番目の柱筋にも柱が立っていた。両建物は第69次調査で検出されているS B 6 6 6 9 の北側柱筋に北妻を揃える。S B 8 2 1 5 は東面築地回廊S C 5 5 0 0 の心から50尺の位置にあり、S B 8 2 1 0 とは20尺の間隔をあけて建つ。S B 8 2 1 5 の南には30尺の間隔をおいて建物S B 8 2 4 5 がある。S B 8 2 4 5 はS B 8 2 1 5 と東側柱筋を揃えている。桁行7間・梁間3間の総柱建物である。S B 8 2 1 0・S B 8 2 1 5・S B 8 2 4 5 にはその北側と東側を通って、素掘りの雨落溝S D 6 6 1 8 とS D 8 2 1 1 がL字型にめぐる。S B 8 2 4 5 のさらに南方、40尺の間隔をおいて建物S B 8 3 0 2 がある。この建物はS B 8 2 4 5 と西側柱筋を揃えている。S B 8 3 0 2 は南半を削平されてしまって、北端の桁行2間分しか検出できなかった。梁間は2間である。

その他築地回廊の区画内では北辺に近く、土壙S K 8 2 1 2・S K 8 2 1 3 を検出した。いずれも深さ30cm前後で、少量の土器・瓦片が出土した。

東面築地回廊S C 5 5 0 0 の東方、発掘区東端に、基幹排水路S D 3 7 1 5 があり、この溝の西岸に沿って南北に建物S B 8 2 4 0 とS B 8 3 2 0 が建てられている。北側がS B 8 2 4 0 で、後述のC期の溝S D 8 2 2 7 の下層で検出した。桁行5間・梁間2間である。柱掘形は一辺1.2m前後の方形で、建物外方へ向かって柱を抜いた跡がある。南側はS B 8 3 2 0 で、桁行7間・梁間2間である。棟通りの北から4番目の柱筋に柱穴があり、建物を北3間と南4間に間仕切っている。この建物の西側柱の位置にあたって点々と土壙があり、柱抜取後の柱穴のくぼみをゴミ捨場として利用したものらしい。少量の土器と比較的多量の瓦片が出土した。

#### C期の遺構

C期に属する遺構は建物8棟（S B 8 2 1 8 - A・8 2 1 8 - B・8 2 1 9・

8222・8224・8300・8305・8325)、門1棟(SB8310)、  
塀3条(SA6624・6629・8217)、築地1条(SA3819)、溝  
6条(SD3715・6607・6631・8226・8227・8301)、  
暗渠2である。建物・門・塀はすべて掘立柱を用いていた。C期には塀で仕切られた区画内の建物の建替えによってC<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>の二時期がある。

この時期にはB期の築地回廊は築地に改修される。築地に囲まれた内部の東北部には塀SA6629・SA6624によって囲い込まれた区画が形成され、それを塀SA8217で南北2つの区画に仕切って、各々に1棟ずつの建物を配する。区画の南側にも建物が配される。

築地で囲まれた内部の排水は2本の溝で東方の基幹排水路SD3715に流れ込む。築地の外側、東方の排水路までの間は顯著な遺構が少なく、基幹排水路に近くやや小規模な建物SB8325がみられる。

築地SA3819は東面を画する施設で、その中心線はB期の東面築地回廊SC5500と一致する。築地本体は東半部がすでに削平されており、西半部で厚さ20cm前後の、流れ出した築地積土の堆積を認めた。築地心から西へ10尺のところには、これと併行する幅30cm、深さ10cm程の素掘りの雨落溝SD8226がある。またSA3819には、調査地区的南端で門SB8310がひらく。SB8310は南半が調査区外になり未発掘であるが、柱間寸法からみて、桁行3間・梁間2間の八脚門と推定される。柱間寸法は桁行北端間が8尺、北から2間目が13尺で、ここを中心間と推定した。梁間は9尺等間である。なお北辺を限る築地は一条通の下に想定されるが、今回の調査では確認していない。

築地に囲まれた内側の東北隅は塀SA6624・SA6629・SA8217によって仕切られる。塀柱間はすべて10尺等間である。SA6629は南北方向の塀で、おそらく北端では北面築地にとりつくと思われ、16間南へのびて東西方向の塀SA6624にとりつく。SA6624の西側は調査区外にのび、東側はSA6629との交点から11間のびて、東面築地SA3819にとりつく。この築地と塀で囲まれた区画はさらに東西方向の塀SA8217によって南北二

つの区画に等分される。SA8219は11間で、西端は屏SA6629に、東端は東面築地SA3819にそれぞれとりつく。SA6624が築地にとりつくところでは、東端の柱と築地との間に凝灰石や河原石を敷き並べているのがみられた。

南北の各区画には1棟ずつの建物が配される。C<sub>1</sub>期には南の区画にSB8219、北の区画にSB8218-Aが建てられる。SB8219は桁行5間・梁間2間の東西棟建物で、柱間は桁行・梁間とも10尺等間。SB8218-Aは桁行5間・梁間2間の東西棟建物で、柱間寸法は桁行9.5尺等間・梁間10尺等間である。SB8218-Aは、その後南へ8尺程ずらして、全く同規模の建物SB8218-Bに建て替えられる。SB8219・SB8218-Aは東面築地から約50尺の間隔をおき、東側の妻柱筋をそろえて建てられる。またSB8219は区画の南北中央に位置し、建物の柱筋を屏SA6629の柱位置に一致させている。建て替えられた建物SA8218-BもやはりSA8219と東妻を揃える。このとき柱筋を屏SA6629の柱位置に一致させるようにする。

C<sub>2</sub>期になるとこの区画内の建物はSB8219がSB8224に、SB8218-BがSB8222にそれぞれ建替えられる。SB8224は桁行5間・10尺等間・梁間2間・10尺等間の身舎四面に、12尺の幅で隅欠の廻をもった東西棟建物で、身舎には間仕切がある。身舎の柱筋を周囲を画する屏SA6624・SA6629・SA8217の柱位置に揃えている。なおこの建物の身舎東妻の柱下には、根腐れ補修のためか、後に礎石が差し込まれている。

SB8222は桁行5間・梁間2間の身舎の南・北・西3面に12尺幅の隅欠廻をもつ。身舎の柱間寸法は前身建物の柱間を踏襲しており、桁行9.5尺等間・梁間10尺等間である。SB8222はSB8224と西の妻柱筋を揃える。この時期にSA6629から10尺離れた東側に平行に、柱間2間の短かい屏が設けられる。これは目隠屏と考えられ、SA6629の柱間のうちSA6624から北へ6間目とSA8217から北へ6間目にそれぞれ対応するので、この柱間が両区画の出入口と想定される。

塀で囲まれた区画の南には他に2棟の建物、SB8300とSB8305がある。SB8300は調査地区の西南隅で検出した。南北棟建物で東西に廂をもつ。南半が未発掘であるが、北半の桁行3間分を検出した。梁間は4間で、柱間は桁行、梁間ともに10尺等間である。建物の東側に沿って北方の溝SD6607から南へ流れ出す浅い溝SD8301があり、これが建物の東側のところで急に深くなる。SD8301はSB8300の雨落溝を兼ねたものであろう。建物SB8305はSA6624の南側にある東西棟で、桁行7間・梁間2間、柱間は桁行が9.5尺等間、梁間が8尺等間である。

築地に囲まれた区画内の排水は、東西に流れる二条の排水溝SD6607とSD6631によって処理される。SD6631は塀SA8217の北側2mのところを塀に沿って東流し、築地SA3819の雨落溝SD8226に合流して約10m南へ流れ、そこで再び東折して築地の下を暗渠によって東側へ抜ける溝SD8227となり、基幹排水路SD3715に注ぐ。暗渠は凝灰岩切石を組んだもので、底石と側石の一部が残存していた。溝SD8227の築地東方約15mの間はすでに削平されていて検出できなかった。もう1条の溝SD6607は塀SA6624の南約16mのところを東流する。築地の西側では幅1m、深さ10cm程で、中央の幅40cmの部分がそれより20cm程掘りくぼめられており、両側と中央の掘りくぼめられたところに玉石の抜取痕跡がある。築地部分では暗渠SX8309でその下を抜け、そのまま東流して東方の基幹排水路SD3715に流れ込む。SX8309には玉石の抜取痕跡はみられず、バラス・瓦片・土器片を混じた汚れた土がつまっていた。この部分に入頭大の河原石3個があるが、後から投げ込まれたものである。SD6607の築地東側10mの間はすでに削平されていて検出できなかった。またその東方もわずかに溝底をとどめるのみで、玉石で組まれていたかどうかは不明である。

溝SD6607とSD3715の合流点に近く、建物SB8325が建てられる。SB8325は南北棟建物で、桁行3間・7尺等間、梁間2間・7尺等間の身舎南北の妻側に幅10尺の廂を付した建物である。

## D期の遺構

この時期に属する遺構には、建物1棟（SB8234）、塀1条（SA8238）、溝2条（SD8237・8239）がある。溝SD8237、SD8239と塀SA8238はその位置関係から一連の遺構と考えられる。

溝SD8237とSD8239は調査地区の東半を南北に平行して流れる。SD8237は幅1m前後、深さ約30cm、SD8239は幅60cm前後、深さ約15cm、両溝の心々距離は約4.5mである。溝は素掘りで、この地区を東西に流れる溝SD6607・SD8227・SD8327のどれよりも新しい。溝SD8239は浅いために、北部では削平されて、検出できなかった。この2条の溝SD8237とSD8239にはさまれた部分の中央に、塀SA8238がつくられる。柱間は9尺等間である。塀には発掘区南端で門がひらく。門の柱間は南側の柱穴の一部しか検出してないので確定できないが、およそ1.8尺程になる。

溝と塀とによって画された東側、発掘区の中央に、南北棟建物SB8234が建てられている。桁行6間・8尺等間、梁間2間・7尺等間の建物で、南から2列目の棟通りにも柱が立つ。塀SA8238との距離は約20尺である。

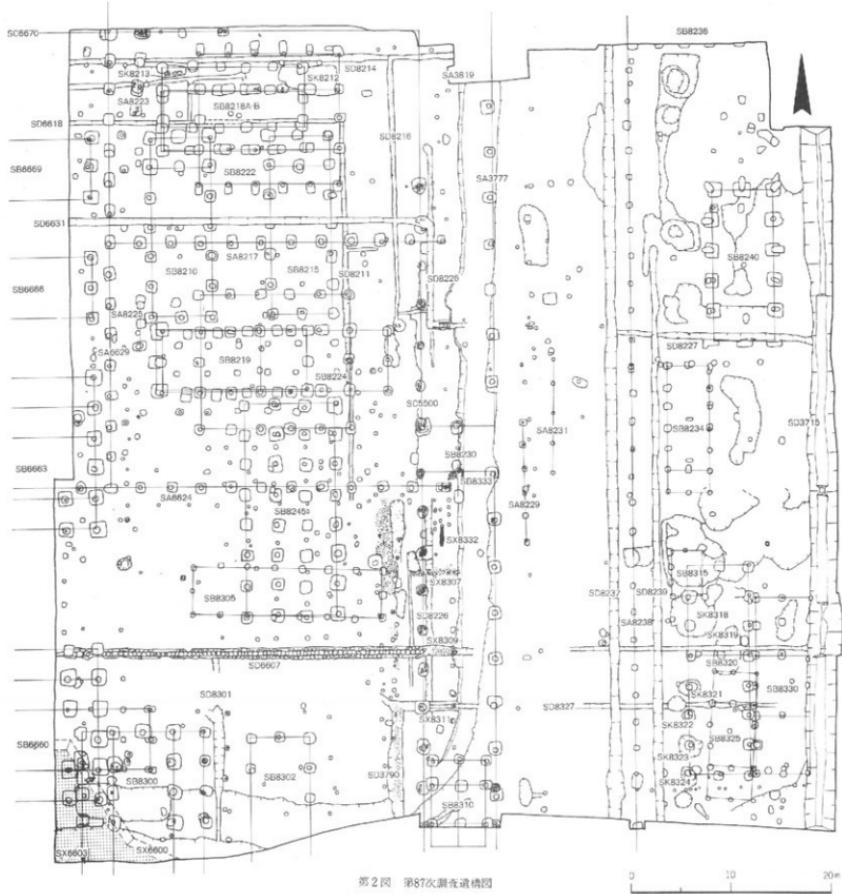
## その他の遺構

発掘区西半（6ABP地区）ではC期の建物SB8224・SB8229と重複して、SB8228がある。柱穴の切合いからB期よりは新しい。桁行5間、梁間2間の建物とも考えられるが、C期の建物の足場穴の可能性も残る。

築地回廊SC5500の基壇上、門SB8230の南約6mのところで、平瓦を南北1列に敷いた上に丸瓦を伏せた遺構SX8332を検出した。平瓦は7枚、丸瓦は6個残っている。性格は不明である。

発掘区東半（6ABC地区）北端では、壁際で5個の柱穴SB8236を検出した。第7次調査との関係で大規模な南北棟建物は考えにくい。東西棟の建物があるいは塀であろう。整地層から掘り込まれており、また遺構の重複状況から、C期の可能性が強い。

6ABC地区の東半、基幹排水路SD3715に沿った西側には、多数の土壤



第2図 第87次調査遺構図

0 10 20 m

が掘り込まれていた。

### 3 遺 物

今回の発掘により出土した遺物は瓦・壇・土器・金属器がある。遺物については現在整理中であり、とくに調査中に気のついた範囲の記述にとどめる。

瓦は型式の判明したものでは、当調査部の編年でいう第Ⅲ期（天平18年～天平宝字初頭）にあたる奈良時代中頃の瓦が比較的多い。

地のほとんどはA期の壇積の擁壁S X 6 6 0 0 の前面から出土した。この中に方形の壇が混ざっていたことは注目される。この壇は壇積擁壁の上縁に用いられたものか、あるいは壇の上面の舗装に使用していた可能性もある。

土器は土師器・須恵器の他、灰釉・綠釉陶器がみられ、三彩を施した鉄鉢の破片も出土した。その他土馬3点が出上している。全般的に見ると奈良時代の末頃と考えられる土器が多い。壇積擁壁S X 6 6 0 0 埋立て時の整地上中からは、SK 2 1 9 の遺物と同時期とみられる土師器、杯Aの破片が出土している。

金属器では刀子・飾鉢・鉄釘・銅釘・鉄針と万年通宝1点が出土している。

### 4 まとめ

今回の調査によって推定第1次内裏の東北隅部分と、それに東接する地区の様相が明らかにされた。

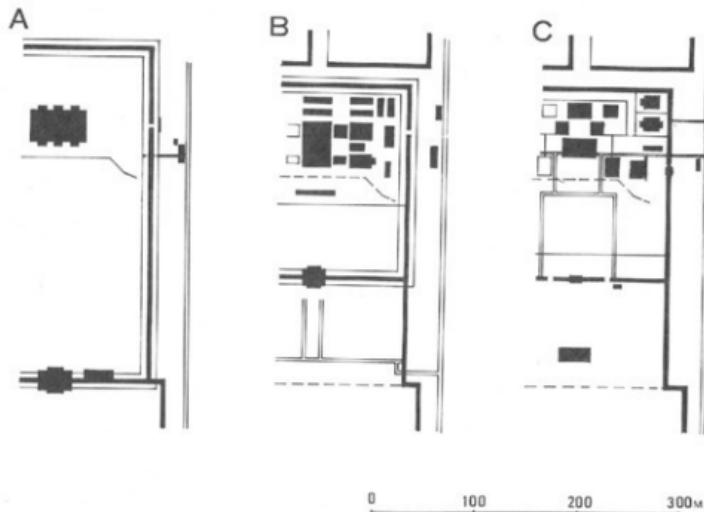
推定第1次内裏の郭内において、第69次・72次調査の結果、A期には壇上の中心部に建つ基壇建物の存在が報告されている。今回の調査地区内ではA期の建物の存在は認められなかった。B期の建物は今回の調査で7棟を検出した。その建物配置は、10尺方眼の基準地割をもつ整然とした配置であり、10尺等間の建物が第69次・72次の調査で検出した中心部の建物と柱筋を合わせて配置されている。C期には前回の調査でも築地で囲まれた郭内中心部分の正殿の背後に、塀によって囲い込まれた一画を検出したが、今回調査した郭内の東北部分においても築地の東北入隅部を塀によって囲い込み、南北に並ぶ2つの区画をつくって、その各々に1棟ずつの建物を配する状況がみいだされた。このような配置は、古図にみる平安宮内裏東北隅部分の昭陽舎・淑景舎の配置に類似しており、

今後この時期における推定第1次内裏地域の性格を知る上に大きな手がかりとなる。

各時期の年代は、A期が奈良時代前半、B期は奈良時代後半、C期は奈良時代末以降にあてられる。

今回検出した東面築地回廊SC5500の桁行柱間は13.3尺強を計り、第27次・41次調査の結果とは異なる値を得た。今回の調査の所見から、当調査地区に現存する根石列によって復原される築地回廊をB期の造営に比定したが、築地回廊についてはまだ多くの問題を残しており、今後の成果や他地区との比較により検討してゆかなければならぬ。

また、第69次調査で検出したA期の壇上の南縁にあたる堆積擁壁SX6600は東に直進せず、今回の調査地の西端で斜め南方にまがることが判明した。これによって、A期の壇上敷地は、東西に袖をもつ空間であることが想定できる。この擁壁と東面を画する築地回廊SC5500、あるいは屏SA3777とのおさまりについては今後の調査にまたねばならない。



第3図 推定第1次内裏追構変遷図

## II 宮跡内および周辺民家密集地域の現状変更届等にかかる調査（第95—3・6・10・11次）

民家密集地における現状変更届等による発掘調査で、いずれも小範囲の発掘にとどまるが、その内北面大垣、西一坊大路にかかるものがあり、その概略を記す。

**北面大垣（11次）** 調査地は、平城宮北面築地が土壘として極めて良好にのこる史跡地に北接しており、また平城天皇陵の前身である市庭古墳の後円部にある。

調査は、畠地の南辺と北寄りにA・B 2本のトレントを設定して行い、その面積は $58.5 m^2$ である。Aトレントでは、市庭古墳の墳丘にかかわる痕跡はすでに削平されて遺存せず、地山上に厚さ10cm内外の粗雑なバラス敷が覆って、奈良時代の瓦・土器片を比較的多く含んでいた。トレントの西端で南に掘りひろげた部分では、東西にのびる厚さ約20cmの黄色粘土からなる精良な盛土を検出した。発掘では80cm程度の幅しか検出しなかったが、さらに南にのびている。

Bトレントでは、西方に向って下降する地山の地形を検出した。わずかではあるが斜面と平坦面をなす部分があり、古墳の原形は削平されているが墳丘の旧状を知りうる手掛をえた。すなわち、トレントの両端で下降する部分は後円部最下段の裾部にあたる。幅2.5mの平坦面をなす部分は古墳の第1段平坦面の痕跡であり、3個の小穴が南北にならんて存在し、円筒埴輪の据付痕跡と思われた。その東の斜面は第2段目の裾部と考えられたが、それより東方は削平が著しい。市庭古墳は後円部直径約150mをはかり3段築造とみられるが、破壊は徹底して葺石や埴輪はまったく存在せず整地屑からは奈良時代の



第4図 第95—11次発掘遺構図

土器の細片を発見したにすぎない。

A レンチで検出した黄色粘土の盛上は、平城宮北面大垣ないしはその壠地（大走り）に関する遺構であり、バラス敷は京極大路に関するものとみられる。

今回の調査によって、指定地内に存在する土塁状遺構が北面大垣そのものである確信を得た。現状では北面大垣の遺構としてはこの地域をおいてほかになく、十分な保存がのぞまれる。

**西一坊大路（10次）** 調査地は南北に長い水田であり、その南と北に東西方向のトレンチを設定した。両トレンチで検出した遺構はほど同じで、トレンチの西部幅約4mの部分は、水田下の床土を除去すると暗褐色砂質土の地山があらわれ、平城京西一坊大路路面敷と考えられた。東部の幅約1.4m、深さ約40cmの溝で、灰色粘質土、青灰色砂質土が堆積しており、下層の砂質土から少量の土器片が発見された。この溝は西一坊大路東側溝にあたる。ただ調査地内では幅員の全体を検出しておらず、東岸はさらに東にのびると考えられる。

今回の発掘所見と、さきに近接地での調査（第82—4次）で西側溝を検出しており、その結果、大路の幅員が約2.4m（80尺）であることが判明した。

なお3次は一条通りより北側、東面大垣のすぐ内部に位置する民家の改築にともなうトレンチ調査で、南北に走る溝2条を検出したが、直接大垣に附属するものではなく、その内側で平行して造られた排水用施設と考えられた。

また6次は第2次内裏北方の外郭官衙地区の北東部にあたり、農小屋を車庫に改築する事前調査として約12m<sup>2</sup>を発掘した。この地は従来の調査から市庭古墳の周濠を埋立て、官衙を造営したことが確認されている。今回もこの埋立てによる整地土を現わし、さらに東西に走る築地南縁部を検出した。この築地の本体は発掘区に北接する現道路にあり、外郭官衙の北辺を限る築地跡と思われる。但しその築地に伴う側溝などは今回の調査では発見されなかった。なお築地の南に南北2.6m以上、東西1.8m以上、深さ25cmの土壙が存在し、土器・瓦片と共に軒瓦3点の出土をみた。

### III 薬師寺の発掘調査

今回の調査は薬師寺伽藍の環境整備にともなう事前調査である。調査は食堂北方、北門西南方、および八幡院（六条大路側溝）地区である。なお、北門西南方地域は調査面積が小さくまた後世の破壊が著しく斜行溝を検出したにとどまり、記述を略す。

**食堂北方地域**　調査地は、北口参道をへだてた東側で、発掘された食堂基壇北辺から約30m北方の地点に当る。金堂西側にあった唐院の移転予定地で、昭和40年仮金堂建設にともない一部発掘が行われた所である。

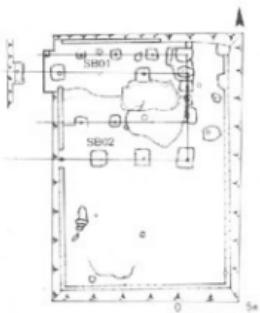
土層の層位は、上層から、近年の盛土である茶褐色上層（厚さ30cm）、耕上である黒色腐植土層（20cm）、赤褐色粘質上層（30cm）、暗灰色粘質土層（10cm）、茶灰色粘質土層である。発掘区西北部の一部では、赤褐色粘質土層と暗灰色粘質土層の間に黄褐色粘質土層（20cm）が入り、また東南部では、赤褐色粘質土層と茶灰色粘質土層の間に四層に分かれる砂層がある。赤褐色粘質土層は若干の遺物を含み、ある時期の整地層で、暗灰色粘質土層以下が地山である。

遺構：発見遺構は、赤褐色粘質土面で大小6個の土壙、暗灰色粘質土面で、奈良時代と考えられる東西棟掘立柱建物2棟および土壙1などを発見した。赤褐色土面で検出した土壙は、全て不整形で発掘区全体に散在している。埋土、遺物から二群に分けられる。一群は、発掘区北寄りに東西に並ぶ2個の土壙で、平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦、瓦器を包含した鎌倉時代の土壙であり、もう一群は南部にある3個の土壙で、大量の瓦、平安時代の綠釉・灰釉を出土し、平安時代の瓦廃棄のための土壙と考えられる。もう1個の土壙は北端東寄りにあり、昭和40年の調査で大部分を掘っている。

暗灰色粘質上面の掘立柱建物2棟は、発掘区北部に重複して検出した。2棟とも2間×4間以上の東西棟建物と考えられ、北寄りのSB01は柱間寸法8.5尺（2.5m　復原尺0.295m）、南寄りのSB02は10尺（3.0m　0.297m）である。東妻をそろえ、柱穴の切合い関係からSB01がSB02より古い。

遺構面の削平や新しい土壌による破壊などのため、確認できなかった柱穴もあり（SB01では北側柱の東から第一番目、南側柱の第一、二番目、SB02では北側柱の第三番目の柱穴が未確認）、SB02は身舎梁間2間、東西両廊付き南北棟建物（4間×3間以上）になる可能性もある。柱掘形は、SB01が一辺7.0cm前後の四辺形、SB02が一辺1m前後の四辺形で、埋土は両者とも赤褐色粘質土である。SB01で7個の柱根が、SB02で6個が遺存していた。また柱穴の立ち割りによれば、SB02の柱穴では柱の沈下防止のため掘形の底に平瓦片を入れこんでいた。柱掘形の深さは、SB01が1.5～2.0cm、SB02が4.0cm前後であり遺構面の削平が著しいことを示している。発掘区西北部で、暗灰色粘質土の上に、SB01の柱掘形がほりこまれた黄褐色粘質土があるが、これは削平された整地層の残ったものであろう。ちなみに、本発掘区遺構面を附近の調査で確認した遺構面の標高と比較すると本発掘区の遺構面が標高5.9.9～6.0.0m、本発掘区西北方の昭和40年9月高天商店の調査、西南方の昭和49年10月西僧房食堂調査の食堂西北角の両者の遺構面が6.0.3mである。後二者は、旧地表をほぼ残していると考えられ、本発掘区遺構面とは0.3～0.4mの差がある。このほか発掘区東北隅付近に柱穴2、南端中央付近に柱根2、SB02内に土壌1を検出したが、柱穴・柱根は本発掘区内では建物にまとまらなかった。

遺物：遺物は、大部分赤褐色粘質上面の土壌から出土し、暗灰色粘質土面では遺構面の削平のためほとんど出土していない。瓦は、平箱約20箱および、南部の3個の土壌から特に多く出土している。軒瓦の大部分は、本薬師寺式複弁蓮華文軒丸瓦、同式偏行唐草文軒平瓦で、ほかに片岡王寺式細弁蓮華文軒丸瓦、本薬師寺式重弁蓮華文軒丸瓦、橘寺式複弁蓮華文軒丸瓦各1点、平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦、鎌倉時代の連珠文軒平瓦などが数点出土している。



第5図 食堂北方遺構配置図

土器は半箱約30箱分出土している。南部の3個の土壌からは主に奈良末～平安初の土師器・須恵器、ほかに平安初期の緑釉花文線刻皿、平安中期の灰釉皿各1点が、北寄りの2個の土壌からは瓦器が出でている。このほか、南部の西側の土壌から、奈良時代の緑釉の建物模型の勾欄部分の断片、およびガラス片各1点が出土している。

2棟の東西棟建物の時期・性格については資料が乏しく確定できないが、一応次のように考えておきたい。時期は、建物の規模、獨立柱建物柱掘形出土の奈良時代前期の須恵器などから、両者とも奈良時代と考える。性格については、両者が東妻を揃えていてSB02がSB01の建て替えと考えられること、食堂・十字廊（食殿）の後方に位置することから、両者とも大炊屋などに関係する建物と考える。

**八幡院地区** 調査地は八幡神社北側であり平城京六条大路南側溝と右京七条二坊一坪内の2ヶ所の土壌を検出した。溝幅は約4.0m深さ約1.7mである。南岸には径10cmほどの丸太を30cm間隔に打ちこんだ護岸施設がみられた。溝内堆積土から奈良時代の須恵器、土師器、瓦が少量出土した。溝から東寺南面築地までの心々距離は約34.0mである。

#### IV 大安寺の発掘調査

大安寺旧境内において家屋新築等にともなう事前調査を2件行なった。

**北僧房** 調査地は從来の大安寺旧境内発掘調査結果からみて講堂を囲む三面僧房の東北隅で、北僧房の東端附近と推定される。調査は33m×5mの南北トレンチ、9m×3mの東西トレンチを設定し、約19.2m<sup>2</sup>について行なった。調査の結果、発掘区北側で中房の一部を検出したが、南半分は中世以降の土壌や擾乱によってすでに削平され、大房を検出することができなかった。鎌倉時代初頭と考えられる井戸1基を検出したに留まった。

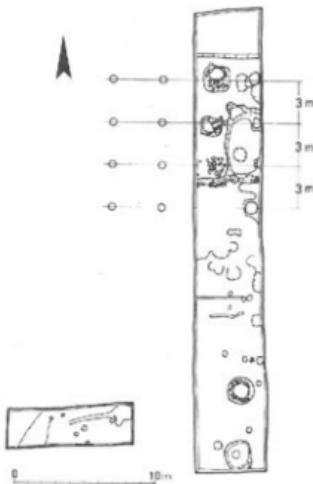
**遺構**：中房・北面中房の梁行通りの礎石および根石列を2列検出した。1列に4つの礎石があり、大梁をかける位置にも柱をもつ梁行3間の總柱建物である。

梁行の柱間寸法は 10 尺等間であり、「資財帳」の中房の記載や昭和 41 年度西面僧房調査の中房の柱間寸法と一致する。桁行の柱間寸法については、礎石が動いているため、正確な数値は求められないが 10 尺以上であろう。礎石は西列で 2 個、東列で 4 個の計 6 個を検出したが、いずれも原位置を移動している。東列礎石は、高低があり根石等の据付け痕跡が認められないことから、いずれも原位置から西に動いていると考えられる。西列礎石も若干移動しているものの、削平された南の柱位置をのぞいて、人頭大の根石をもった据付け痕跡が検出されている。礎石は東列南の逆截頭方錐

形の凝灰石製礎石のはかは自然石を用いている。なお、梁行北側柱心から約 1.6 m 北で遺構面に落差（20 cm）があり、基壇状になっている。

井戸：発掘区南半で検出した。柱を転用したとみられる円形の井筒を用い、その上方は軒瓦・丸平瓦・埠・凝灰岩切石を積み重ね化粧している。井筒は、長さ約 1.6 m、径 0.8 m あり、半蔵してからくりぬいたもので、下端には地下水を入れるための仕口が設けてある。出土した瓦器によって鎌倉時代初頭のものと考えられる。

遺物：遺物は遺構面を覆う暗灰色粘質土から多量に出土した。その多くは瓦類で、土器は少ない。瓦類は、軒瓦・丸平瓦のはか鬼瓦・埠などが出土している。大半は、奈良時代のものであるが、若干、平安・鎌倉時代のものも混じる。125 点出土した軒瓦のうち、いわゆる大安寺式とよばれる単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦（6138）と、羊歛状に連なる 3 回反転均整唐草文軒平瓦（6712）の組み合せが半数近くを占めている。



第 6 図 北僧房遺構配置図

上器類は量的に少なく、いずれも小片である。土師器（皿・杯・甌・燈明皿）須恵器（杯・蓋・鉢・壺・甌・淨瓶）のはか、瓦器・施釉陶器などが出土した。時期は、奈良時代中葉から鎌倉時代にかけてのものが混在する。施釉陶器には、灰釉円面鏡・二彩皿・綠釉碗・皿・壺・青磁碗などがある。

他に埴輪が出土しているが、大安寺寺域内の杉山古墳のものである。

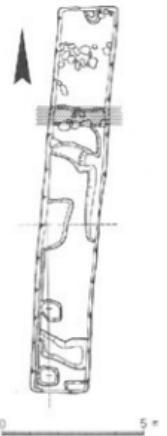
**東僧房東方** 調査地は、大安寺旧境内東面僧房の東側にあたる。

検出した遺構は、東西棟建物2棟、南北溝1条、土壤等である。検出面は地表下30～40cmの灰褐色バラス層（地山）である。東西棟建物は2棟とも西妻柱のみの検出であったが、柱通りを描えて配置している。南北溝は幅4m、深さ0.6mと大規模なものであり、東面僧房の外側を区画する位置にあたる。なお、凝灰岩製の切石（35×80cm）が据付けられた状態で出土したが、その性格は不明である。

## V 法華寺旧境内の発掘調査（第95-1・4・5・7・8次）

法華寺旧境内における発掘調査を5件実施した。いずれも家屋改築にともなう事前調査であり、発掘面積も限られている。しかも後世の擾乱が著しく、顕著な遺構はわずかであった。95-4次は法華寺旧境内南半中軸線に近く、位置的に南門が想定できる場所での調査で、建物1棟、東西溝1条を検出した。

建物遺構は南北に並ぶ小穴列であり、柱間2.4m、2間分である。この小穴列の北3.0mの位置には、40×50cmの天端の平らな石があり、これを同一建物の礎石と想定することもできる。もしそうであれば、前述した3つの小穴はいずれも礎石の抜取り痕跡であり、南北3間以上の礎石建物が復原できよう。建物については、発掘区が狭長なため、東西方向の規模は不明である。東西溝は幅50cm前後、深さ10cmが残存していた。溝の南側には面を揃えた川原石が並ぶが、北側ではその痕跡が明瞭でない。あるいは溝の南側に存在す



第7図 第95-4次遺構図

る建物と関連して、溝の片側にのみ基壇縁をかねた石が配された可能性もある。溝の北側は、黒茶褐色砂質土が堆積し、その中に礫が多く捨て込まれた状況がみられたが、時期的には溝よりも後のものである。

今回検出した建物は、発掘区の制約などから極めて一部しか調査できず、その性格を明らかにすることはできなかった。

95-8次は、既設水道管取り替えにともなう掘削の立会であるが、当該地は現法華寺南門前の道路であり、近世の絵図では南門両脇の築地原に添って巨大な礎石が数個配列されていて、從来から金堂もしくは講堂がこの附近に当ると推定されてきた。そのため水道管取り替えに当っては特に南門前附近だけは機械を排して手掘りにすることを求めて立会した。掘削は以前の水道管敷設時の掘形を再度掘り直したため、生ぶな土は切れ切れに断面にしか現われない結果となったが、東西に10尺間隔で並ぶ5間分の掘立柱跡を検出した。これは中軸線で折返すと7間の建物になると推定され、法華寺講堂もしくはその前身の藤原不比等邸内の主要建築に当ると思われる。法華寺現本堂の地下でも当初の掘立柱建物を礎石建てに改作した事実があり、食堂跡と推定されている。南門附近の今後の調査が望まれる。

なお1次、5次、7次（立会）では特記すべき遺跡は検出しなかった。1次は法華寺南門推定地（4次）のすぐ南側で地形も一段下り、阿弥陀淨土院へ連なる場所であるが、奈良時代に遡る遺構はなく当時は南へ下る沼状の低湿地であったことが確認された。

## VI 海竜王寺北方の発掘調査（第95-2次）

駐車場造成にともなう調査で、調査地は海竜王寺現境内の北に接する水田で、金堂の北々東に位置する。検出した遺構は築地1条と溝2条である。

築地（SA1146） 発掘区南端を東西にはしるものである。搅乱のため2箇分しか確認できなかったが、基底幅は6尺、柱間寸法は6尺等間である。

溝（SD1150） 築地SA1146の北2.8mの位置を東西にはしる幅約1.6m

の素掘りの溝である。南岸は遺存状況良好であるが、北岸は削半を受けている。溝の堆積土は2層にわかれ、下層を奈良時代、上層を平安時代初期に比定できる。築地SA1146の北南落溝と考えられる。

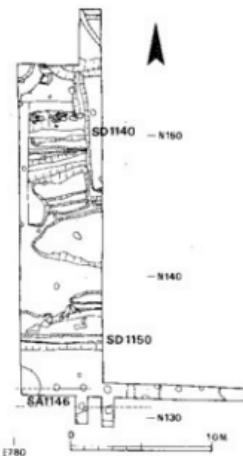
溝(SD1140) 溝SD1150の北15m(心々距離)の位置を東西にはしる幅1.9m、深さ1.2mの溝で、大きい自然石を側面に並べて護岸としている。護岸は北端では良く残っていたが、南岸では発掘区西端に一部残っているにすぎない。底は素掘りのままで化粧はない。瓦類、上器類、貨幣、木簡などが出土し、奈良時代に比定できる。

この築地SA1146、東西溝SD1150はともに、現在までに確認されている平城京条坊区割のどれとも明確な関連性を示さないが、築地と東西溝のいずれかが海竜王寺旧寺域北限の一端を示すものであることは確実であろう。ただ、両者のいずれが寺域北限であるかについては決しがたく、今後の調査を待ちたい。

## VII 西大寺の発掘調査(第95-9次)

庫裡増築の現状変更にともない西大寺の依頼によって行なった調査である。

調査地は、現境内北門西脇で伽藍中軸線上にあり、中大門跡推定地である。発掘面積は、33m<sup>2</sup>と小規模であったため、中大門は発見できなかつたが、4条の東西溝を検出した。うち平行に走る2条の溝(北幅0.5m、南幅1.2m)は東西方向の道路の側溝である。北側溝の一部は木樋を用い、その先端はコの字形に石組した暗渠となっている。道路幅は溝心々で5.8mあり、西大寺創建以前の平城



第8図 第95-2次発掘調査図

京条坊の坪を画する幅2丈の小路と考えられる。なお創建後も金堂院と塔院を区画する寺内道路として利用したとみられる。

この道路は、平城宮西面北門に通じる一条南大路と一条北大路の条間路にあたり、從来大路規模（8丈）に推定していた。しかし今回の調査で幅員が2丈であることを確認し、さらに、検出した道路心と推定西面北門心がほぼ一致することから、この条間路は小路であったと考えられる。



第9図 平城京調査位置図